

本のひろば

出会い・本・人

遺産相続できない懺悔録 宮崎 光

本・批評と紹介

J.L.スカ 著／佐久間 勤、石原良明 訳
聖書の物語論的読み方 水野隆一

雑賀信行 著

キリタン黒田官兵衛 上・下巻 川村信三

北澤宏一、栗林輝夫 著

原子力発電の根本問題と我々の選択
政池 明

カルヴァン・改革派神学研究所 編

叢書「改革教会の神学」1

カルヴァンと旧約聖書 秋山 徹

関西学院大学キリスト教と文化研究センター 編、樋口 進 編著

自然の問題と聖典 声名定道

黙想と祈りの集い準備会 編

テゼ 片山はるひ

イレーネ・ディーシェ 著／赤坂桃子 訳

お父さんの手紙 小塩 節

月本昭男 著

詩篇の思想と信仰 IV

第76篇から第100篇まで 石川 立

潮 義男 著

神の国の奥義 上 深谷春男

関 啓子 著

まさか、この私が 鎌野善三

近刊情報

書店案内

5 MAY
2014



本人の言葉に触れつつ
生涯と思想をたどる



共感する神

非暴力と平和を求めて

佐々木勝彦



文化との出会い G.W.レイスロップ 平岡仁子編訳

● 本体1,500円
これからの礼拝は、いかなるものを目指すのか。多様化する文化との出会いと対話を通じ、礼拝の刷新を考察した、礼拝学の世界的権威による日本での講義と説教。

二十世紀の礼拝



主が、新しい歌を

● 本体1,500円
加藤常昭編
加藤さゆり説教集
F E B Cで好評を博した詩編講話と鎌倉雪ノ下教会での説教27篇を収録。罪と闇に覆われる人間を新しく立ち上がらせる、神の恵みの真実を伝える。復活の主の光に照らされて生きる、人間の自由と喜びがここに！

恵み深い主に感謝せよ

黒木安信

詩編に聞くⅢ

● 本体2,000円



詩人たちが繰り返し歌う、神の慈しみへの感謝は、時代を超えて今日もこだまし続け、私たちを賛美へと招いている。詩編を深く味読する聖書講解の完結編！

好評発売中！

黒木安信

『新しい歌を主に——詩編に聞くⅠ』

● 本体1,800円

『嘆きの谷を通るときも——詩編に聞くⅡ』

● 本体1,700円

『創世記に聞く——初めと終わりを生かす神』

● 本体1,800円

『起きよ、光を放て——クリスマス・イースター説教』

● 本体1,800円

第二次世界大戦で故国を追われたユダヤ人哲学者ヘッシエル。その「熱情の神」の思想に励まされ、戦争体験を神学的に消化し、21世紀の神学がめざすべき方向を示唆した小山晃佑とモルトマン。三人の生涯と言葉から、「歴史」を考え、今を生きる私たちの「生き方」を問う。

● 本体1,900円



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549

本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e shop 教文館



出会い・本・人

遺産相続できない懺悔録——宮崎 光

「オジイチャンの本は、全部キミにあげるからネ」と言われて、祖父の書齋で壁一面の本棚を見上げて、まったく興味も湧かなかった幼少期。その言葉を遺言のように思い出し、鬼気迫る思いで本棚を見上げたのは、神学校に進むことを決めた二十代の頃。

祖父は日本キリスト教団の牧師だった。北海道最北の島「礼文」に生まれ、勘当同然で札幌に出て小野村林蔵牧師の書生となり、肺病を幾度も患いながら神学校へ進み、東京、北海道、九州の教会を歴任した後、終生、神奈川県葉山町で牧会した。戦中は東京の池袋に居を構え、焼夷弾の降る中も家族と共に生きのび、戦後の貧しい時代にも読書による勉強を欠かさなかった。つましい生活の中で祖母は、祖父の書籍代を工面するために腐心したらしく、「オバアチャマの着物がおジイチャンの本になった」と、私は父親から言い伝えられていた。そのような因縁つきの祖父の蔵書を「我が家宝」と意気を感じて、実家を整理する時には、ほとんどすべてを私が遺産相続のごとくに引き取った。：が、聖公会司祭である私には転任があり、広い書齋のある教会に赴任するとは限らない。幸いにも歴任した教会は、収納には困らなかったが、倉庫にしまった本たちは、暑さ寒さの中では傷みや虫食いにもさらされてゆく。古書店にも何度か見立ててもらったが、祖父は線引

きや書き込みが多く、それらは引き取られることなく手元に残る。もちろん、その線引きなどから、何を祖父が大切にしていたかを伺い知ることはできたのだが、結局、傷みの激しい本は泣く泣く処分せざるを得なかった。生活費を切り詰めて購入された本を、私は粗末にしたのだと、申し訳ない思いがした。

読みたい本はあるけれど、必要性があつて読む本や、アップデートされる専門研究の本もあり、限られた人生の時間においては思い切った取捨選択が迫られる。引越しのたびに書棚に並べきれない、読みきれないであろう本たちには別れを告げなければならぬ。それでも、書店に並ぶ本には思わず手を伸ばしている。

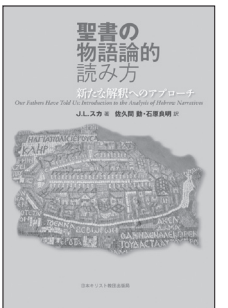
デジタル化が進んでも、やはり本の重さ、厚さ、大きさの違い、紙の味わい、ページをめくる時の音、それらを全身で体感する読書は、人が愛しむべき時間であり続けるだろう。そして、本に込められた古今東西の叡智や感性を、心を尽くし、知恵を尽くして読むとき、人は誰でも、時空を超えて受け継がれるべき知恵の再創造に加わってゆくことになるだろう。ただ、今の私は、(書籍代よりも)その時間を工面することに腐心している。

(みやざき・ひかり)立教大学チャブレン、日本聖公会東京教区司祭

物語の面白さを作り上げているものを明らかにする

J・L・スカサ
佐久間 勤、石原良明訳

聖書の物語論的読み方 新たな解釈へのアプローチ



水野隆一

私は、この二十年というものの、ヘブライ語聖書、とりわけ、その物語の「文芸批評的アプローチ」を専門にする者として、聖書物語を共時的に読むことに対する理解が広がらないのを嘆いてきた。佐久間氏が「訳者あとがき」で述べているように（二八五頁）、「歴史的批判的研究」が主流であるだけでなく、教会の中でも外でも、他の読みがあることも知られていない状況が続いていたからである。

ところが、本書の出版という出来事によって、その理由の一端が示された。つまり、適切な入門書、「教科書」と呼べるものが日本語で容易に手に入らなかったことも、共時的な読みが広がらなかった原因の一つだったのである。共時的読みに関する数々の入門書・概説書（「文献表」一六六頁以下を見ると、その多さに驚かされる）が出版されている英語圏とでは、差ができて当然であった。

本書の著者、また、その執筆意図については、「序文」や「訳者あとがき」に要を得て簡潔に記されているので、そちらを見ていただきたい。ここに紹介されているのは、「論理的留保」

をしながらも「近代の小説分析法を聖書の物語に適用する」方法である（二八六頁）。

古代の物語に近代の文学を分析する方法を用いることについては、疑問を持つ読者もあるろう。古代の著者が思いつきもしなかった概念を用いて、その文学の真価を評価できるのかと。

しかし、もし、この考えを極めて厳密に適用するならば、現代の読者（つまり、私たち）は、古代はおろか、近世、いや、現代でも、同じ時代の、同じ文化の中で生み出された文学作品しか理解できないことになってしまう。時代や文化を超え、他の言語に翻訳されても、それでも文学作品を味わうこと（鑑賞）ができるのは、そこに、共通した文学的特質があるからであり（これが「共時的」研究をする根拠である）、本書は、それを明らかにする方法を提示する。

本書の方法は「物語論」と銘打たれているが、実は、物語論にはさまざまな「流儀」が存在する。その中でも、本書は、ジェラルド・ジュネットの方法に大きく依拠している（『物語のディスクール』）。それは、本書を読み進めていくうち、分かっ

てくる（例えば、一七頁、一一五頁以下の用語の選択などにお

いて）。批評家と同じ数だけ方法が存在するというのがこの分野の特徴であるが、著者は、複数の観点が有り、複数の分析結果が可能であることを、あちこちで示している（例えば、「読者の興味」について記す一〇四―一〇七頁参照）。これもまた、物語論や文芸批評的アプローチの特徴である。

正直なところ、物語論にはじめて触れる読者は、本書を読んでも戸惑われることだろう。プロット（第三章）や観点（第五章）、登場人物（第六章）などという、物語論では重要なポイントも普段の読書では意識されておらず、「語り手と読者」の関係（第四章）でさえ、考えたこともないという方がほとんどだろう。物語論に基づく批評は「読書のスローモーション」と呼ばれることがあるが、意識に上らない部分を取り上げ、どのようにしてそれが作用するかを明らかにしようとしているので、光を与えてくれるものであると同時に、「疑わしい」と感じさ

せるものでもあり得る。

そこで、本書は、全体を通して一気に読むよりも、例として挙げられている聖書箇所を自ら、そこに書かれている解説と照らし合わせながら読むことをお勧めする。そうすると、聖書物語の語りの巧みに驚かされ、物語の面白さを再発見することができるだろう。そして、他の箇所にも、同じような「仕組み」があることに気づいていくことになる。こうなれば、批評家の仲間入りである。その意味で、本書は、奥の深さと広がりを持つ、「教科書」と呼ぶにふさわしい労作であると言える。本書に続いて、百家争鳴の物語論、文芸批評的アプローチの入門書・教科書が、翻訳もオリジナルも含めて、日本語で読めるようになることを願って、筆を置くこととする。

（A5判・二二〇頁・本体三〇〇〇円＋税、日本キリスト教団出版局）
（みずの・りゅういち）関西学院大学神学部教授、関西学院大学キリスト教と文化研究センター長

新約聖書注解がついに完結!!

現代聖書注解 INTERPRETATION



《第41回配本》シリーズ全44巻
ローマの信徒への手紙
P. アクティマイアー 村上実基 訳
義認と律法の関係など、多くの新しい
気づきへと導く、説教者必携の注解書。
A5判 上製函入・394頁・6,264円

新約注解 105,319円
全17巻セット 《各巻 A5判・上製函入》
*10セットのみ

現実と対峙する預言者のテキストに密着

預言者の想像力

現実を突き破る嘆きと希望
W. ブルッゲマン 鎌野直人 訳
四六判 並製・272頁・3,024円

様々な視点から「信」の意味を問う

信とは何か

現代における〈いのち〉の泉
2013年上智大学神学部夏期神学講習会講演集
宮本久雄／武田なほみ 編著
四六判 並製・344頁・3,024円

聖書にはじめて触れる人のために

聖書入門

主を畏れることは知恵の初め
落合建仁／小室尚子
A5判 並製・120頁・1,404円

賀川豊彦を支え、遺志を継いだ女性

賀川ハルものがたり

鍋谷由美子
四六判 並製・160頁・1,620円

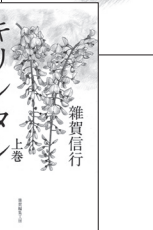
日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyoubp@bp.uccj.or.jp 《価格8%税込》
<http://bp-uccj.jp>

キリスト教を熟知した編集者による大河ドラマ座右の書
 雑賀信行著

キリシタン黒田官兵衛

上巻・下巻



川村信三

今、時の人は黒田官兵衛である。神田の大型書店の本棚に、すくなくとも一五〇冊の「官兵衛」関連新刊書が並び、まさに出版戦国時代の様相を呈している。官兵衛人気は、もちろんNHK大河ドラマの影響である。その大河ドラマ「軍師官兵衛」の「キリスト教考証」をお手伝いしている関係で、評者は「官兵衛」のキリシタンとしての素顔を考えることが多くなった。最大の関心は、キリシタンとしての「小寺官兵衛」がいかに描かれるかという点につきる。

「官兵衛」をキリシタンとしてクローズアップする書籍もいくつか書かれている。官兵衛受洗の時期、伴天連追放令への対処。生涯キリシタン信仰を貫いたか。いろいろと難しい問題が並ぶ。官兵衛のキリシタン要素を全く無視している作品も多い。しかし、キリシタンとしての官兵衛を扱ったものの中でも本書は、編集者としての作者の手腕が遺憾なく発揮された好著であり、玉石混交の出版戦国時代のなかにあって、これは、疑いもなく「玉」に属すると確信した。キリシタン官兵衛に言及する作家や研究者の解釈や憶測を一つひとつ丁寧にとりあげ、その

解釈の真偽を判定していく手法は見事である。何より作者はキリスト教を熟知している。キリシタン官兵衛シメオンを追おうとする読者必見の書である。

雑賀氏の「キリシタン官兵衛」にはいくつかの特徴がある。まず、類書にはない「キリシタン」側の史料と行動様式を正しく理解しようとする試みである。そのためには、すこし冗長な感をおぼえるがキリシタン史の概説的知識も示す必要があったのだろう。また、キリスト教を宣布しようとした宣教師の報告書がはたして信頼できる史料たりうるのかという問いにもはっきりと答えている。二〇年ほど前までは、日本史研究者の間で、フロイスの『日本史』など第一次史料として使えないと断言していた人もいた。しかし、各地で城の掘り割りや屋敷跡が考古学的に発見されるにおいて、フロイスの記述が極めて正確かつ詳細であることが確認された。宣教師としての思想上の誇張を勘案すれば、フロイスの記述は日本史描写にとつて使えると、今では判断されている。雑賀氏はその点を丁寧に示す。また、雑賀氏がキリスト教（聖書）関連事項を熟知されている証

拠は、大友宗麟の正妻を「イザベル」（英・エリザベス）ではなく「イゼベル」（英・ジュゼベル）であると正しく指摘されている点などにみられる。

キリシタン官兵衛を復元する教科書のような役割を果たす本書には、今後、さらに深めてほしい点もあった。雑賀氏が使用している「史料」はほとんどすべて翻訳によるものだという点である。村上直次郎や松田毅一などのキリシタンの碩学によって積み重ねられてきたキリシタン史料の翻訳であるが、なかには翻訳上の誤記や、原文が刊行される際の転記ミスなども指摘できる。オリジナルから刊行本になる過程で編集者たちが取捨選択して、自分たちの興味にしたがって削除していることもありえる。つまり、「原文」を参照しないかぎり、本当のことはわからないとの疑問がわく。たとえば、官兵衛が三〇年前に洗礼を受けたという「報告書」の記述は、実はローマのイエズス会文書館の原文には明らかに「三年前」となっている。その

刊行本には「三〇年」と誤記されていた。ゆえに、官兵衛が一〇代でキリシタンになったという誤った解釈の余地を生んだ。また、官兵衛は一五八五年に洗礼を受けたとする証言は、原文の読み方によつては一五八四年の可能性も捨てきれないことがわかる。つまり、これからのキリシタン研究はオリジナル文書にまで遡つて再考しなければならぬということなのである。史実にできるかぎり則るかたちで描かれる大河ドラマの小寺官兵衛を、本書を座右におきつつ、キリシタンの背景をもってみると面白い。キリシタン官兵衛理解にとつて欠かせぬ本であることはまちがいない。

（上下刊共・四六判・二三四頁・本体一四〇〇円＋税・雑賀編集工房）
 （かわむら・しんぞう）上智大学文学部教授・キリシタン文庫所長

〔復刻版〕〈初版一九三八年改造社刊〉

小説

キリスト

賀川豊彦〔著〕

〔544頁上製〕3,000円（税別）

賀川は渾身五年の歳月をかけて、

この小説にキリストの愛の姿を描いた。

牧師である賀川が社会運動に関わることについて、「私はイエスの弟子だから社会運動を行うのです」と語るように、彼の幅広い社会運動の思想と実践の根底には、イエスのように生きたいという彼のキリスト信仰がありました。本書はまさに「賀川のイエス・キリスト」なのです。

（賀川豊彦記念松沢資料館館長 加山久夫「編者あとがき」）

株式会社 **ミルトス** <http://myrtos.co.jp>
 〒102-0073 東京都千代田区九段北 1-10-5-2F
 Tel: 03-3288-2200 Fax: 03-3288-2225

巨大技術といかに向き合うべきか
北澤宏一・栗林輝夫著

原子力発電の根本問題と 我々の選択

バベルの塔をあとにして



政池 明

本書は二〇一二年十月に京都の日本クリスチャン・アカデミー関西セミナーハウスで行われた「エネルギーを考える——原子力発電の根本問題と我々の選択」と題する集会の記録である。この会合では東京都立大学学長の北澤宏一氏と関西学院大学教授の栗林輝夫氏が講演を行った後、参加者の自由な討論を行った。本書にはその講演と討論の内容が詳しく記されている。

まず福島原発で起こったことの真実を説明し、次にキリスト教倫理の立場から巨大技術としての原発の問題点を考え、問題提起を行うことよってこれからの歩むべき道を示している。

最初に福島原発民間事故調査委員会の委員長でもある北沢氏が福島原発事故の報告を行った。北沢氏はこれまでの種々の報告や報道ではあまり触れられていなかった事故の真相をわかりやすく述べた。原発の当事者達が事故のずっと以前から危険性を知りながら、安全性を無視し、経済性のみを重視していたこと、原子炉暴走によって首都圏の全員が避難せざるを得なくなるという最悪のシナリオが心配されていたにもかかわらず、それが国民には知らされていなかったことなどの驚くべき事実

が具体的に示された。電力会社、政治家、官僚などの安全の無視、危険の隠蔽は正義に反する行為であると言わざるを得ない。更に、北沢氏は世界の原発の状況、自然エネルギーの開発の可能性について述べ、今後、原発なしでも電力をまかなえることを明らかにした。

続いて、栗林氏は神学者の視点からキリスト教が技術をどのように捉えてきたか、教会が科学技術、特に原子力とどのように向き合ってきたかを述べたのち、古代シュメール・バビロニア文明のバベルの塔の建設が各地から集まってきた人々の言葉の混乱によって中止に追い込まれたという旧約聖書の記述を紹介した。また原発は人間の技術過信の産物であり、神の領域を侵すものであるとの批判を紹介した。更にバベルの塔の建設に独裁的な権力が必要であったと同じように原発の建設には中央集権的な権力が介在せざるを得なかったことを指摘した。聖書学者達はバベルの塔の建立を「神への反逆」であり、「神になる」とする人間の思いがかり、「神への挑戦」と解釈している。バベルの塔の物語は神の意図によって巨大テクノロジーから民

衆が自由になろうとする物語だったと考えることができるという、興味深い指摘がなされる。

技術は人類が過酷な環境を生き抜く為に神から与えられた力と解釈することができる。しかし、人間を尊重しない現代の経済信仰と技術信仰によって造りだされた「原子力は不可欠」という言葉がもはや通用しないことは明らかである。


講演の後、参加者による討論が行われ、多くの分野の人々から重要な指摘や提言がなされた。

本書は人類が自ら構築した原発という巨大技術といかに向き合うべきかを問いかけている。原発は一步誤れば人類を破滅に導く危険を内蔵していることが福島原発事故で証明された。傲慢な人間がこの危険な技術を利用して利益を得ようとする

ことは人類全体にとっての大きな危機であると結論せざるを得ない。巨大科学技術を論ずるには第一義的に科学者、技術者の良心の問題、ひいては人類全体の根源的な罪の問題を考えるべき

内村鑑三が「よき宗教、よき道徳、よき精神さえあれば、国民は不運を幸運へと転じることができる」と論じ、デンマークのエネルギー事情を論じたことは問題解決への示唆を与えている。

(まさいけ・あきら) 京都大学名誉教授・素粒子物理学 (四六判・二一〇頁・本体一八〇〇円+税・新教出版社)



新刊

死生学年報 2014

語られる生と死

東洋英和女学院大学
死生学研究所編
●A5判並製 本体2500円+税

古代イスラエルの死者のゆくえ
高井啓介

アルス・ヴィヴェンディ、
アルス・モリエンディ
鈴木桂子

●
モンゴル人の死生観
サラゴワ

●
日本のシャーマニズムと
死者との交流
佐藤憲昭

●
緩和医療現場における
「お迎え」現象とその周辺
奥野滋子

●
誰が話を聴くのか?
一被災地における
霊の話と宗教者
高橋 原

●
町はホスピスになれないか
一被災地で心のケアに
携わって見えてきたこと
宇根 節

●
恵みの鉛
村上陽一郎

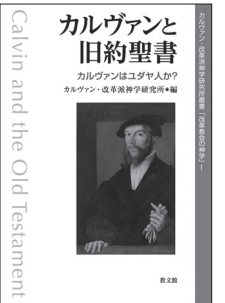
●
他、8篇

LITHON [リットン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

カルヴァンの信仰と思想を受け継ぐために
カルヴァン・改革派神学研究所編

叢書「改革教会の神学」1
カルヴァンと旧約聖書
カルヴァンはユダヤ人か？



秋山 徹

本書は、カルヴァン・改革派神学研究所がカルヴァン生誕五〇〇年を記念して二〇〇九年五月に行った記念講座の講演・礼拝説教と、それに先だって日本キリスト教会神学校で二〇〇七年から二〇一二年にいたるまで継続して開かれた公開セミナー「カルヴァンと旧約聖書——カルヴァンはユダヤ人か？」の報告、その他で構成されている論文集である。「カルヴァンはユダヤ人か？」という表題に「えっ、そんな噂があるのか？」と驚かされるが、これは要するに、カルヴァンは若い日に人文主義の古典文献に対する取り組みの姿勢に触れており、ヘブライ語にも熟達し、また、ユダヤ教のラビとも交流があり、ユダヤ人がどのように旧約聖書を解釈しているかについても深い知識をもっていた、ということだ、カルヴァンの旧約聖書解釈、特に詩篇解釈の詳細に深く迫ろうとした意欲的な取り組みの成果である。カルヴァンは『キリスト教綱要』一書の人とのイメージが固着している人も多いかと思うが、近年カルヴァンの旧約・新約各書のほぼ全巻に亘る注解や膨大な量の説教、手紙や礼拝指針などの大量の著作が公刊され、研究が進み、新しいカ

ルヴァン像が提供されてきている。この書で扱われている主題も、カルヴァンの生誕五〇〇年を期に、現代の教会と社会にそのような新しい研究の進展から新たなインパクトを与えていることを証しするものとなっている。

「セミナー報告」では、聖書学、歴史学、組織神学、実践神学などさまざまな分野からの参加者を得て、共同作業のかたちでカルヴァンの六つの詩篇理解をあらかじめ定められた作業過程に従って解剖し、その深みを捉えようとの試みで、この詩篇研究によってカルヴァンの教会論、聖餐理解を解く鍵を見出し、参加者の意気込みと神学をする楽しさが伝わってくる。

記念講座で来日講演したチューリッヒ大学の宗教改革史の気鋭の教授P・オピッツの「カルヴァンの旧約聖書」についてや、宗教改革史研究の中心地ドイツのエムデンにあるヨハネス・ア・ラスコ図書館教授A・ラウハウスの「ジェネローヴ詩篇歌と旧約聖書」、「改革教会と旧約聖書」の二本の講義はきわめて密度の濃いもので一読の価値がある。同じ詩篇四六篇を歌うにしても、ルターのコラル「神はわがやぐら」は、この詩を試み

の中に生きる教会の状況に置き換えて直ちにキリストに結び付けて歌うのに対し、カルヴァンの自作詩篇歌では忠実に詩篇の言葉をテキストに即して歌っているという違いに両者の違いが良く現れていて興味深いし、旧約も新約も、ともに一貫した神の恵みの契約を表しているものとして読むカルヴァンの基本姿勢から解き明かされてゆく、簡潔で、合理的で、暗喩や寓喩的解釈によらず、その背景や文脈、著者の目的を重んじながら一言も神の言葉としておろそかにしない聖書解釈の方法が明らかにされている。私見では特に、オピッツの講義は旧約聖書を通読して、そこから神の言葉を聞き取る方法を学ぶ信徒のために、ラウハウスのものは旧約をテキストにして説教をする牧師のために極めて有用なものと思われる。カルヴァンの旧約理解の方法を論じると共に、「今日の視界の中での旧約聖書」についても論じられ、刺激が与えられる。今日の旧約聖書学によれば、旧約聖書はモーセの時代にシナイ山で起こったのではなく、

「二神教の革命」といわれるイスラエルの捕囚期後の神理解に立って聖書全体が編集され成立していると考えられている。このような最近の旧約学の発展の成果を取り入れる場合にも、五〇〇年前のカルヴァンの聖書解釈方法に学びながら、旧約聖書を神の言葉として聞き、新約聖書を通して語られる覆いを取り除かれ、さらに明らかになった光のもとで生きた福音として伝える方法論が示唆される、その基本の姿勢を学ぶことができる。

日本キリスト教会神学校という改革長老教会の教理と教会観に立った神学校、神学研究所であるゆえに、教派横並びの神学の学びでは突破できない深みに向かって進んでゆく道が開かれていることを、これらの学びの様子から窺い知ることができる。

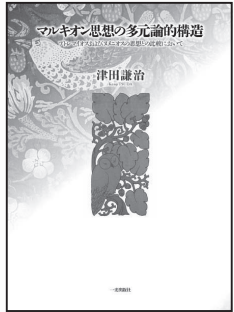
(あきやま・とおる 日本基督教団上尾合同教会牧師)
(A5判・二二〇頁・本体三〇〇円+税・教文館)



マルキオン思想の
多元論的構造

プロレマイオスおよびヌメニオスの思想との比較において

津田 謙治
Kenjji Tsuda



多神論的な潮流を分析する
日本初の論考！

2世紀のローマで、マルキオンは旧約と新約の神の分離を説き、旧約は救済に関係ないとして新約だけの正典を作成。しかし、これを契機として聖書が正典化されていく。

A5判
定価 4,410 [本体4,200+税] 円
ISBN978-4-86325-055-0

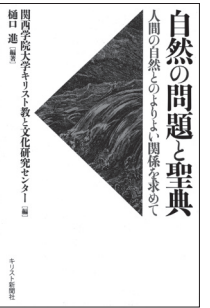


株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

聖典世界を現代世界と結びつけた諸論文
関西学院大学キリスト教と文化研究センター編
樋口 進 編者

自然の問題と聖典

人間の自然とのよりよい関係を求めて



若名定道

東日本大震災、福島原発事故から三年が経過し、この間、キリスト教研究においても、自然災害や科学技術をめぐりさまざまな議論がなされてきた。本書は、関西学院大学キリスト教と文化研究センターで行われた研究プロジェクト「自然の問題と聖典」の成果であるが、内容は多岐にわたっており、読者は本書より最新のキリスト教研究について多くことを学ぶことができる。収録された論文の掲載順番は研究発表の順に従っており、体系的な企画というよりも、「自然と聖典」を焦点としてゆるやかに繋がった論文集という体裁になっている。以下においては、聖典に焦点を合わせた論文と、現代社会（原発・震災・環境・動物）に関連した論文とに大別し、本書の内容を紹介することにしたい。

まず聖典に焦点を合わせた論文。編者である樋口進の「旧約聖書における自然災害」と嶺重淑の「イエスの自然観——イエス伝承における自然と神の国」とは、それぞれ自然に関わる旧約聖書（地震、洪水から疫病、野獣まで）と新約聖書（イエスにおける自然とイエス伝承の自然との対比）のテキストを取り

あげ、「自然の問題」を論じている。樋口は、現代の日本人の自然災害に直面した無力感に対応するものが旧約聖書にも見出すことが可能であるが、「旧約聖書の基本的な信仰は、神の自然支配への信仰です。すなわち、ヤハウェは自然を支配する方であり、自然現象を用いて民の救いや裁きを行うことができる」という信仰です（四一頁）と指摘する。この聖書における「自然の問題」は、平林孝裕「神はどのように線をひいたか？——人間・動物とその境界線」では旧約聖書における肉食の問題として展開され、「ノアの箱舟の出来事を通じて、動物・家畜の位置づけが決定的に変化」し、「人間と神との共餐という次元が『肉を食べる』ことに含意される」ことが示される。こうした聖書的な自然との関わりは古代キリスト教へ引き継がれる。これを扱うのが、土井健司「古代世界における疫病・食糧危機とキリスト教——なぜキリスト教は生き残ることができたのか」である（疫病とキリスト教の拡大」という仮説への言及を含む）。しかし、「聖典と自然」という問題は聖書を超えて他宗教の諸聖典においても共有されるテーマであり、本書の最

後に収録された松田史「自然・環境問題と佛教」では、仏典に基づいて「共生」「小欲知足」の思想が紹介されている。以上から、読者は聖典における自然をめぐる多様な問題を学ぶことができる。

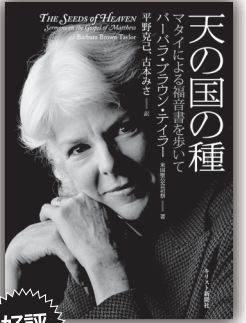
本書の特徴は、こうした聖典世界を現代世界と結びつけた点にあり、それは現代社会における原発、震災、環境、動物を扱った諸論文において見事に展開されている。詳細については、それぞれの論文をぜひお読みいただきたいと思うが、原発と震災については、奥野卓司論文（動物愛護観のダブルバインド——震災・原発事故における動物救援活動を例に）と内藤新吾論文（原発問題とキリスト教——平和、環境、人権）で扱われる。内藤論文の「原子力というのは、本当に差別的構造です」（二二〇頁）、「国はいろいろなことを隠します」（二一九頁）との指摘は説得的である。環境については、特に近藤剛論文（神学の緑化——パウル・ティリッヒを手がかりに）と内藤論文文

とが関連しているが、近藤論文では「エゴ神学」の構想が提示される。そして、動物に関連するのが、大宮有博論文（名古屋学院大学における実験動物感謝記念礼拝の取り組み）と奥野論文である。

本書は、「キリスト教と自然・科学技術」に関心ある方に推薦したい啓発的な論集である。

（四六判・三三三頁・本体二四〇〇円＋税・キリスト新聞社）
（あしな・さだみち 京都大学キリスト教教授）

キリスト新聞社の本
Kirisuto Shimbun, Co., Ltd.



好評発売中

天の国の種

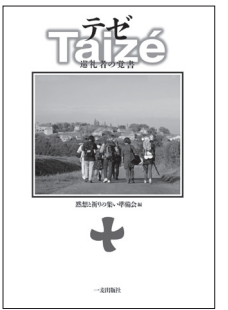
いま、最も愛されている説教者！ 待望の翻訳！
読み物としての説教
マタイによる福音書を歩む
バーバラ・ブラウン・テイラー 著
平野克己 古本みさ 訳

現役説教者であり、いま最も愛されている聖公会の女性司祭の説教集！ おとぎ話を語るかのように、聞き手をそのただ中へ引き込み、聴く人の心を燃やす説教！
著者プロフィール：一九五二年生まれ。エモリ大学、イェール大学神学大学院を卒業後、米園聖公会司祭として、幾つかの教会で牧師を務めた。現在、シカゴ州のピート・カレッジの教授、アメリカで最も好評のある説教者のひとりであり、世に愛されている書道家でもある。

キリスト新聞社
351-0114 埼玉県和光市本町 15-51
和光プラザ 2 階
TEL 048-424-2067 (価格税別)
E-Mail support@kirishin.com
URL http://www.kirishin.com

「泉」への招き
黙想と祈りの集い準備会編

テゼ
巡礼者の覚書



片山はるひ

「待つていた本がついに出了ー」。これが、この本を手にした私の率直な思いだった。テゼという名は、今ではキリスト教世界では知られるようになり、その歌や祈りの集いの存在を知る人は多くなった。だが、「テゼ」がなんであるのかを簡潔にのべ、そのメッセージの核心を語り、具体的に巡礼のガイドブック的役割までも担う本は今まで日本では存在しなかったからだ。これからは、「テゼ」を知りたい人には迷うことなく、まずこの本をすすめることができる。多くの美しい写真で丁寧に作り込まれた装幀は、テゼが大切にしている簡素さと美しさをともに表現しているかのようだ。また、第六章には、テゼに関して知りたい人、テゼを訪れたい人のための情報がすべて盛り込まれている。

わたしは、今まで三度テゼを訪れた。一度めは自分が若者として、二度めは若者たちの同伴者として。三度めに訪れたのは、二〇一三年のワールド・ユース・デイにフランス経由でマドリッドに向かった時だった。その時の二十名近くの若者たちに一番深い印象を与えた地は、パリでも、マドリッドでもなく、こ

「今どきの若者はね……」と物知り顔でいう大人たちに、かみしめて欲しい言葉である。テゼは、人間が常に神の似姿であり、その渴きを真に満たすことができるのは神のみであることを、理論ではなく体験から教えてくれる。

若者がテゼでの滞在を希望するとき、ブラザーたちはまず一週間の滞在を勧め、始めに一枚の紙が渡される。

あなたは、沈黙と祈りによって、キリストという泉へと歩むためにテゼに来ました。あなたは自分の人生に一つの意味を見つけ、生きる力を取り戻し、今生きている場所で、責任を果たすための準備をするためにここに来たのです。

教皇ヨハネ二十六世の言葉を借りればテゼは「小さな春」、希望を実体験することのできる場所である。本書の、第四、五章では、世界のテゼ共同体の日常生活や活動が具体的に紹介されている。ここでは、テゼが決して限定された一つの「場所」ではなく、一つの精神であり、世界中のいたる所で「絶望のないところへ希望を」もたらす小さな種として息づいていること

のテゼだった。わたしは、テゼを一般に説明するときに、「アンチ・デイズニールランド」という表現をよく使う。年間十万人以上の若者を迎えるこの場所には、いわゆる若者を引きつけるようなものは何もないからだ。フランスの片田舎の教会、一見体育館とも思える簡素な聖堂、テント生活、シンプルな食事、そして一日三度の礼拝。そんな場所へ全世界から若者がとぎれることなく集まってくる理由はどこにあるのだろうか？

本書のオリビエ・クレマンの言葉には、その問いに答えるためのヒントが記されている。

「今日の若者たちは、福音の現実、すなわち交わりについての説教や議論には関心がありません。彼らは、その交わりが本当に体験できる場所を求めているのです。それは、どんな背景や苦悩を背負った若者も例外なく受け入れられ、大切にされる場所のことです。(中略) 祈ることは同時に世界に対して責任を担うことなのだ」と示される場所のことです。わたしにとって、テゼはそのような道を誠実に模索する具体的な場所なのです」(五二頁)。

が語られている。

バングラデシユの、劣悪極まるマイメンシン刑務所を毎週訪問するブラザー・ギヨームのエピソードは、その象徴である。

「こんな風に、ブラザー・ギヨームの歩く世界は、どこを向いても限界や悲しみや絶望に満ちています。問題は次から次へと押し寄せます。刑務所の面会室には、そんなわたしたちの世界の闇が凝縮しているようです。しかし、ブラザーが歌い出し、『さあ、あなたも歌って』と促されるとき、わたしたちが、あえて希望を引き寄せるように、と招かれるのです。どんなに闇が深くて、あえて歌うようにと」(九九―一〇〇頁)。

テゼが、単なる歌と礼拝の集いではなく、希望を告げる「小さな春」であり続けることの秘密が、ここに隠されている。今の時代、今の教会、今の若者たちに、もはや希望をもてなくなってしまう人々すべてにも、一度手に取っていただきたい本である。

(かたやま・はるひ 上智大学神学部教授)
(A5変判・一四四頁・本体一八〇〇円＋税・一麦出版社)

大人のついた大きな「嘘」と愛
イレーネ・デイジーエ著
赤坂桃子訳

お父さんの手紙



小塩 節

本書は、第二次世界大戦直前から終結期にかけての悲惨な時代、東欧ハンガリーに生まれ育ったひとりの少年の成長記であり、六歳から十二歳にかけての子どものらしい少年の目が見た身の周りの世界がそのまま語られている。

ハンガリーは小なりといえ、オーストリアやスイスよりも多い一千万を超える人口を擁し、いわゆるヨーロッパ諸語とはまるで違う東方系マジール語を国語とし、強いカトリック信仰を保つ、誇り高い民族である。しかし東のロシア（ソ連）と西のドイツに挟まれ、二つの世界大戦では両側から思うさま踏みこじられ、何重もの被占領の悲劇を味わった。日本では美しい都ブダペストと大河ドナウで知られているに過ぎない。しかし戦後の社会主義と教会との関係について多くの神学者が深刻な思想的苦悩を味わったのが、ソ連の圧倒的軍力による民主化運動圧殺の「ハンガリー事件」だった。

さて、主人公である赤毛のペーター少年は、首都から少し北に離れた地方都市の名士である医師を祖父に持ち、快活な外交官の父の子として生まれたが、交通事故のため母を早く失い、

父と子二人の生活を送る。しかしそれは実に幸せて、何ひとつ不自由のない毎日だった。

この時期の少年を扱うならば、普通は残酷な時代の犠牲と、恐らく隠微な性の目ざめなどを語るものだが、この作品はそういった暗い歪みのない、深い意味で明るい成長物語であり、楽しいクリスマススの歌も聞こえてくる。

作者はニューヨークとベルリンの二都に住んで活躍する作家で二児の母、一九五二年生まれ。いくつかの短編小説は全米でベストセラーであり、映画化もされている。児童文学の名手でもあり、本書はドイツ語訳からの重訳だが、独訳はドイツで児童文学賞を受賞している。原題は「ふたつのしあわせのあいだ」で、第二次大戦開始直前の平和で豊かだったハンガリーと、祖父と父を失いみなし児となったのに思いがけず心豊かに守られる戦後の生活。本書はこの二つの時期に挟まれた悲惨な大戦期の記録なのである。アメリカ人らしい人のいい物の見方が強いが、明るい文章の奥に、人類史の深い悲しみと、にもかかわらずしなやかに生きていく若い生命への共感がしつかりと作品を

支えている。

さて、ハンガリーを代表してベルリンに駐在する外交官の父は、一人息子との二人の生活をベルリンで続けるが、一九三八年十一月九日にドイツ全土で行われたユダヤ人への襲撃事件「水晶の夜」を目撃する。ペーターの早く亡くなった母はユダヤ系だった。そこで父は翌々日にはペーター少年をハンガリーの祖父のもとに届ける。しかし毎週末必ず手紙を送ると約束して。約束はずっと守られ続けた。しかしある日、タイプライターが手に入ったからこれで書くぞ、という断りで始まる「最愛のむすこ」への手紙が通算二百通を越えるようになった頃、少年は入室禁止になっていた祖父の書斎で、偶然、ベルリンに送った筈の自分の手紙がすべて箱に入れて保管されており、祖父のタイプには打ちかけの書簡箋に「最愛のむすこよ」と始まる一行を見つけ、巨大な「嘘」の真相を一気に知る。これが作品の山場だ。

ベルリンでハンガリーの外交官だった父は、多くのユダヤ人の脱出を助けようとビザを出したりした行為が知られて、処刑されてしまったのだ。それを隠そうとした祖父の愛！ だがその祖父もドイツ軍の侵入直前に死んでしまう。

大人のついた「嘘」の話なのだが、それは少年への大人たちの深く強い、実効力ある「愛」の物語である。少年が「嘘」を嘘と知る衝撃的な場面を読み進めた読者は、ひそかな涙とともに、ゆるがぬ人の愛を、肉親のみならず多くの人の愛をひしひしと感じとるだろう。

ユダヤ人問題が実は大きな背景であるが、本書はアウシュヴィッツやワルシャワのゲットーも出てこない。ギリギリと読者の胸をえぐる悲痛な告発はない。あるのは、美しいハンガリーの自然をバックにした愛と成長の物語である。

（小B6判・二二六頁・本体一〇〇円＋税・新教出版社）
（おしお・たかしドイツ文学者、ひこばえ幼稚園園長）

新教出版社

聖書歴史地図
ATLAS OF THE BIBLE

新教タイムズ プリチャード編 日本語版監修 荒井章三／山内一郎他

B4判・272頁
本体26214円

壮大で立体的なカラー地図と図版600点に詳細な聖書時代史を配し、聖書学・考古学・オリエンタル学・言語学の総力を結集した画期的成果。学校、教会に必携。

カラー版聖書大事典

ワイゴード編 日本語版監修 荒井章三／山内一郎

菊倍判・1100頁
本体39806円

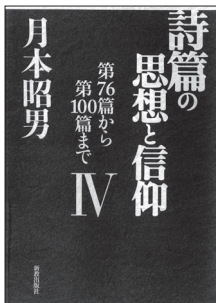
4千以上の聖書用語を71名の専門家が的確に解説。総カラー一頁。

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
TEL: 03-3260-6148
Email: eigyo@shinkyo-pb.com

古代イスラエルの信仰の消息を伝える

日本昭男著

詩篇の思想と信仰 IV
第76篇から第100篇まで



石川 立

ドイツ遊学時代の或る日、評者は学生寮に月本さん（当時はそうお呼びしていた）を訪ねたことがある。台所と食堂を兼ねた寮生共同の部屋で、アキオ（月本さんはそう呼ばれていた）は六、七人の若いドイツ人学生に囲まれて、熊に出くわしたときの対処の仕方を話していた。日本では熊は自分が獲った鮭を竹笹にひっかけ担いで運ぶ。したがって、熊に出くわしても慌てる必要はない。右手と左手でそれぞれ親指と人差し指の輪を作って熊に差し出せば、熊はその輪っかに竹笹を通してひよいと担いで運んでくれるのである。この話の落ちに学生たちは反応よく笑った。食後でお腹もふくれており、彼らはアキオのデザート話に満足気だった。人を楽しませるサーヴィス精神満載の「エンターテインメント（語り）」であった。一九八〇年頃だったろうか、テュービンゲンでのことである。

本書は著者による詩篇注解全六巻の第四巻目に当たる。二〇〇三年に上梓された第一巻から十年の歳月が流れた。この間著者は、研究者、教員としての多様な業務をこなしながら、たゆまず詩篇を丹念に読んできたのである。本巻の「はしがき」に

よれば、第一巻の刊行以来、著者は古代イスラエルの人々の信仰の消息を読者に伝えたいと願ってきたという。

本注解は地道な研究に根差した手堅い手法によって書かれている。各詩篇について「私訳」、「訳注」、「構成、主題、背景」、「思想と信仰」と展開する。「訳注」では、詩篇の一語一語が歴史的に丁寧に調べられる。詩篇の「構成、主題、背景」にも客観的な分析による見解が示されている。以上の考察に基づいて「思想と信仰」では古代人の「信仰の消息」の様相が描かれる。この段階で、注解書によっては「説教」を語り出すものもあるが、本書は論拠に則った記述を守っている。アキオのエンターテインメントへの傾斜は抑えられている。

著者が詩篇の理解をどのように深めているか、一例を挙げて確かめてみたい。本書が扱う第七六一第一〇〇篇のうち、第八七篇は意味のつかみにくい詩の一つである。著者はこの詩の特色を「異邦の民をシオンで生まれた者と宣言する点」にまとめた上で、この点に関する二様の解釈を紹介する。一つはディアスポラを念頭においた解釈で、本詩は「シオンがディアスポラ

の民の靈性上の故郷であり、彼らもまたエルサレム神殿を中心にする信仰共同体の一員である」と訴えているとする。しかし、著者は二つ目の解釈が本文に即していると判断する。それは「二種の終末論的な解釈」で、異邦の諸民族がヤハウェに帰依し、神の都シオンに受け入れられる時代の到来を描いているとするものである。第八七篇をこのように規定して、著者は次にシオンに住まうヤハウェが諸民族を治める全地の支配者だと信じる「シオン神学」について言及する。他のシオン神学の詩がヤハウェによる諸民族の圧制を詠いあげるのとは異なり、本詩は、異国の民をシオンで「生まれた一民と宣言し、彼らもまたヤハウェの民である」と見なしているのである。詩篇の時代には諸民族はまだヤハウェ信仰と無縁であるが、本詩には、地上の全国民がヤハウェに帰依しシオンに巡礼する時代を展望する終末思想が語られている。著者によれば、本篇は、終末時にシオンの門をくぐってヤハウェ神殿に詣でる諸々の民をヤハウェの

民として受け入れる詩篇として読むことができる。著者は、この解釈と、本詩冒頭で「ヤハウェは」シオンの門を愛される」と詠う理由とを結び付け、詩篇の小気味よい「語り（エンターテインメント）」の片鱗を読者に気づかせている。

本注解ではその性格上「語り（エンターテインメント）」は抑えられている。しかし、「語り」への欲求が詩篇における「語り」の発見の形で生きている。サーヴィス精神も底流に見出される。古代人の「信仰の消息」はこの「語り」とサーヴィス精神によって読者に伝わるであろう。この注解書は本書に手をのばす読者をひよいと担いで詩篇ワールドに運んでくれるにちがいないのである。

（いしかわ・りつ＝同志社大学神学部教授）
（四六判・三八〇頁・本体三二〇〇円＋税・新教出版社）

聖公会出版

——新 刊 案 内——

聖公会の教会問答 信仰の手引き

著 ● 岩城聰

聖公会の教理を学ぶ基本は、「祈祷書」の中で大切にされてきた「教会問答」。本書は聖公会の教理、アングリカニズム（聖公会神学）、聖書神学などの深い神学的洞察に裏付けされたその解説書。聖公会の教会・信徒待望の必携の書。



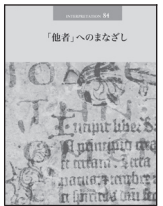
（四六判 本体定価1800円）

「他者」へのまなざし

日本版インタープリティション 84号

総合監修 ● 日本昭男・大貫隆・西原康太

「他者」について聖書はどのような指針を示しているのか。カインとアベル、人種差別の問題、家族のあり方といったテーマから「他者」の問題を考える。注目の論文4点などを収録。

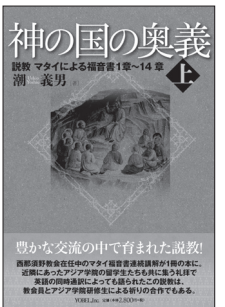


（A5判 本体定価2000円）

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
☎03(3235)5681 FAX 03(3235)5682
http://seikokai-publishing.jimdo.com
nsk-bookshop@company.email.ne.jp

神の国の奥義への誘いとなって心に深く迫る書！
潮 義男著

神の国の奥義上 説教マタイによる福音書1章～14章



深谷春男

「寄せ来たる潮の流れに巻き込まれ深海の水草頭に絡まる」

主にある親しい友人、潮義男牧師がマタイによる福音書の講解説教集を刊行された。出版を前に今度、説教集を出しますと予告をされていたが、実際に潮師から贈呈されるとその装丁に感銘を受けた。グレーの色調に茶色のモノトーンに近いフラ・アンジェリコの「山上の垂訓」の図柄が霊的な恵みの世界を物語っていた。書店に並んでいるなら思わず手に取ってみたいくなるような素敵なデザインだ。中をめくってみるとマタイによる福音書の中の1章から14章に至る58の説教が並んでいる。316ページ。なかなかの大作だ。

書評を依頼されたこともあって、数時間かけて一気に読んだ。わたしも日本基督教団の牧師の一人として毎週講壇に立ち、説教を語る。主として講解説教をする。その働きを、もう36年間もしてきたことになる。一つ一つ読んでみると、自分とは異質なものを感じたり、非常に近いものを感じたりした。わたしはこのように語ったが、潮師はこのように語るか。「なるほど

……」と感心したり、「いやこはこのような主題の方がいいのに……」と自分の積義や説教を参考にしながら読み進んだ。時にはライバル意識と競争心(?)をもって読まざるを得ないのは説教者の宿命であろうか。

そもそもこの説教集は、著者が西那須野教会の牧師時代(2003年～2007年)の公同礼拝で語られた説教で、近くにあったアジア学院の留学生も集う関係で、英語の同時通訳者(常時5、6名交代で奉仕された)のために、説教の完全原稿を土曜日の午前中にはメールで送付する必要があり、それがそのまま、この説教集へと結晶したということだ。それゆえであろうか、アジア各地から来られた方々への配慮もあって、西那須野教会に集う日本人と外国人のための合作のような趣が至る所にある。潮師にとっては「すばらしい体験」「宝のようなもの」であると記されているが、なるほど、それで納得がいった。この説教集はマタイによる福音書の講解であるが、語られる内容は多岐にわたり、自由に語られる。日本文化のこと、例え

ば秋田西馬内盆踊りのこと、現代日本のカルト宗教のこと、日本の精神的状況へのカウンセリングの有効なること、日本基督教団の戦争責任告白への言及、日本の家族を巡る状況や非行少女の悲しみ、日本の政治、戦時中のホーリネス弾圧のこと、ミッシオとレミッシオ(寛解)理解、ドストエフスキーの文学から芥川龍之介の小説への言及、さらには夫婦げんかのこと、(教員が訪問すると牧師家庭としての)こやかな雰囲気が変わるので、誰か来ないかな、と待ちわびた、という文章には思わず笑ってしまった)。また、尊敬する島隆三先生、小出忍先生、また、神学生の時に北森嘉蔵先生のエピソードが出てきて、祈り導いてくださった先生方の懐かしい口調まで耳元で響いてくるようだった。特に62歳で召された義兄である西海静雄先生の闘病の様子や祈りの記事など、感無量だった。まさに、「寄せ来る潮の流れに流されて」、深夜の書斎で一人静まって読み進むうちに、大きな魚のお腹のうちヨナが告白したような「深海の水草が頭に絡まりつく」ような経験をした。バビロン捕囚の経験をして神への信仰が深められ、苦難を通して深く深く掘り下げられ練られた神の民の信仰が、イザヤ書53章の苦難の僕の

代贖をもってその頂点に達すように、潮師の体験した一つ一つの出来事が、神の国の奥義への誘いとなって心に深く迫ってきた。

彼は不思議な人物で、高校生の時に独学でピアノを覚え、1年間でベートーベンのピアノソナタ32番を弾けるようになり、高校生時代はピアノとドストエフスキー三昧の生活。ドストエフスキーを学びたくて早稲田大学ロシア文学に入ったが、学生運動たけなわで授業もなく、ひたすらクラシック喫茶でニーチェばかり読んでいて、大学中退という。その彼が、真つ暗闇のただ中で、神の福音を聞き、ついに主イエスに捕らえられ、伝道者になった。

ただ、上巻にはまだニーチェは出てこない。下巻の主の十字架復活がどのように描かれるのか楽しみである。

天国の秘儀伝えんとの説教を聞く口元の髭に笑みのこぼれて

(ふかや・はるお東京聖書学校吉川教会教師)
(A5判・三二六頁・定価二八〇〇円+税・ヨベル)

専門家が自身の回復過程を克明に描く
関 啓子著

まさか、この私が
脳卒中からの生還



鎌野善三二

本書は、脳卒中による後遺症を改善するために奮闘しておられる方々とその家族に、どれほど大きな励ましとなることでしょうか。さらにその他の様々な理由で、懸命にリハビリをなさっている人々、あるいは病と闘っている人々にも、「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」という聖書の言葉は本当ですよ、と力強く語っているのです(五五頁)。

著者は、神戸大学大学院保健学研究所客員教授で医学博士。失語症を始めとする高次脳機能障害の専門家として三〇年あまり臨床研究をしておられました。しかし二〇〇九年七月、脳梗塞を発症し、高次脳機能障害と左手足の麻痺を抱えることになりました。著者の表現を借りると「ミイラ取りがミイラになった」のです。しかし、これを神からの試練として受け取った著者は、自分の回復過程を専門家として克明に記録しました。昨年、専門分野を扱う医学書院から出版された『話せない』と言えるまで』は、患者と医療従事者の双方の目を開かせる画期的なものとなり、多方面から注目をあびていると聞きます。

本書は、医学専門書には記せなかった多くの感動的な出来事を描いています。「私は有意と思われるたくさんさんの偶然(＝神様の配慮)を本書中に述べることで神様に感謝したいのです」(五頁)というところをはじめとして、神様に純粋に信頼する心があちこちに見受けられます。読んでいる私も、胸から熱いものが何度もこみあげ、著者をこのように用いてくださっている神に感謝しました。

本書は、「青天の霹靂」「急性期」「回復期」「復職準備」「復職」「退職後」の六章からなっています。愛するご家族と別れて神戸大学に単身赴任し、忙しく研究と教育に励んでいた著者が神戸三ノ宮の繁華街で突然倒れ、救急車で近くの病院に運ばれる様子を述べた最初の章は、さながらミステリー小説の冒頭のようにです。偶然と思えるこの出来事の背後にも、教え上げると一〇項目にも及ぶ神の配慮があったことを著者は明記します(七九頁)。この時に、自分の症状を研究者として冷静に分析し、これが大脳の右半球損傷であろうと見当をつけていたのです。

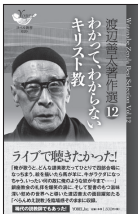
著者が勤める大学の所在地にちなんで著者が命名した「チーム名谷」は、急性期、回復期を通じて大きな助けとなったことには感動しました。これは、医学部保健学科に属する専門家集団で、多職種間共働の実践の場になったようです。また、「見えていないのに意識に上らない」という「無視」の病状が自分にあったゆえに、患者の気持ちを初めて理解できたという経験も、今後の研究活動に資するに違いありません。

優れた治療、ご主人の支え、著者の懸命なリハビリにより、著者は一〇か月という短期間で復職。左手に障害のある中で単身生活をしつつ、授業とともに一〇名の大学院生の論文作成の指導をし、全員の学位取得が実現したのです。その学位授与式で皆が感涙にむせたことは言うまでもありません。

二〇一一年春、単身での生活に限界を感じた著者は、惜しまれつつ退職し、ご主人と共に東京での生活を再開されました。現在もリハビリに励みながら、「三鷹高次脳機能障害研究所」

わかって、わからない
キリスト教

読み継がれる名著の復刊!
渡辺善太著作選⑫



ライブで聴きかたがた!
* 渡辺善太「聖書論」との出会い：関田寛雄
* 渡辺善太小伝：岡村民子
* 渡辺善太小伝：岡村民子
読み応えのある、心に響きわたる地味溢れるメッセージ!
全く色あせることのない「聖書論」に基づいた、燦然と輝く善太節の復活!

※絶賛発売中!

ヨベルの新刊・既刊ご案内

齋藤孝志著 応答：小野寺功

道・真理・命2

ヨハネによる福音書に徹して聴く(7~12章)

「光」として世に來られたイエス・キリストを生き生きとしたメッセージで活写する渾身のシリーズ!

既刊：道・真理・命1 (1~6章)
続刊：道・真理・命3 (13~21章)
*ヨベル新書・各1000円(税別)

A・クリューン著 村椿・松田共訳

私は戦争のない世界を望む

「民主的な民衆がなぜ戦争を推進する政治家を選んでしまうのかを解明する本!」と好評。(富田正樹氏紹介)
*46判変型・196頁・900円(税別)

潮義男著 神の国の奥義上

説教 マタイによる福音書1章~14章

豊かな交流の中で育まれた説教! 教会員とアジア学院研修生による祈りの合作!
*A5判上製・316頁・2,800円(税別)

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp

〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858

自費出版の専門出版社

を運営し、患者の気持ちを理解できる治療者として労しておられます。また講演要請に応えて、日本各地を回っておられます。本書の最後にご主人の一文が載っていました。「連添いに起こった脳梗塞は、その姿勢、性格は連添いから奪わなかった。リハビリ中は、授業に役立てようと自分の記録を詳細に残してほしいと要望していた。…：利き手が動かず、発話障害がみられ、決断力が鈍ったかもしれないが、知的能力と共に人間としては何も変わっていない。それが最も有難い神様のご配慮であった」(二七三頁)。そのご主人は、今、著者を支えて全国各地の講演会に飛び回っておられると伺っています。

(かまの・よしみ)日本イエス・キリスト教団池田中央教会牧師
(四六判・一八〇頁・本体一四〇〇円+税・教文館)

■日本キリスト教団出版局

十字架とリンチの木

ジェイムズ・H・コーン著／梶原壽訳

米国南部で「リンチの木」に吊るされた何千もの黒人は、繰り返し十字架につけられたイエスそのものであった。黒人神学の先駆者の「全著作の継続であり完成点」。

A5判・306頁・本体3800円

ヨハネの黙示録を読もう

村上伸著

ローマ帝国による皇帝礼拝強制とキリスト教迫害が続いた一世紀末に書かれ、不可解な表現に満ちた黙示録を、46回にわたって読む黙想集。混沌の現代に、確かな生の基盤を示し希望を語りかける。

四六判・208頁・本体1800円

■教文館

人を生かす神の息

聖書から聞く現代へのメッセージ

近藤勝彦著

神の導きによって生かされているとはどういうことか。聖書の御言葉に聞き、「聖霊」の働きを語る説教を29篇収録。

B6判・234頁・本体1900円

INFORMATION

近刊情報

天地創造物語

説教と黙想

及川信著

天地創造の物語は、私たちに何を語りかけるのか。現象としての創造を追求するのではなく、現実に向き合いながら神に問い、神に問われる信仰者の歩みを導く説教集。

四六判・296頁・本体1800円

■キリスト新聞社

神さまはマルチリンガル

ステイヴン・フォートーシス著／浜島敏訳

聖書翻訳者たちの魅力溢れる物語！ われわれの常識ではあり得ないというような文化の中で、どのように十字架の福音を伝えようかと毎日悪戦苦闘している翻訳宣教師たちの物語。

四六判・328頁・本体2200円

■新教出版社

人間への途上における福音（仮題）

J・L・フローマトカ著／佐藤 優訳

チエコのプロテスタント神学フローマトカが著した唯一の教義学書であり、神の言葉と人間と教会をめぐる雄大な神学的構想を記した主著。本書の訳をライフワークとしてきた佐藤優氏の渾身の訳業。7月予定。

A5判・340頁・予価3500円

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1771F	022-223-2736	共用		fcqwks24@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区稲毛2-2-1 様ヶ丘駅前ビル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://seikokai-publishing.jimdo.com	nsk-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.com.home.ne.jp/taishindo/	taishindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kiristoku.youshoten@me@ybb.ne.jp	00150-9-595509
ハイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7.biglobe.ne.jp/~yldnrcs/bs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00680-8-47
静岡聖文舎	420-0812	静岡市葵区古庄3-18-12	054-264-0264	054-264-4416		info@s-seibun.co.jp	0810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsta/	nagoya-seibunsta@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		kjordan@mbx.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www11.ocn.ne.jp/~osakabos	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plaza.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18 三宮ビル2F	078-331-7569	078-331-9833			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0016	広島市中区鞆町7-28	082-228-4914	082-223-0951			01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net/	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	901-2134	浦添市港川12-25-1	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

新教出版社

福音と世界

2014年5月号

特集 創造された世界—その現代的意味

聖書と環境…………… R・ボウカム
 被造物、創造主、そして原子力…………… 山脇直司
 自然神学再考…………… 今井尚生
 ハム屋の創造物語…………… 石原潔
 日本の農と創造…………… 行本尚史

好評連載 Ⅱ 新教70年の名著

武田清子『土着と背教』…………… 鶴沼裕子
 岩村昇『ネパール通信』…………… 石川信克

編集室から

春の色にあふれる道を歩いていると、やわらかな風に乗ってふとよい香りが漂ってきた。いったい何の香りかとあたりを見回すと、見知らぬ美しい花が咲いていた……、としよう。

もし、ある人はその花を〇と呼び、ある人は××だと呼ぶとしたら——その存在が特定の名をもっていなかったら——、私たちはその花の存在を否定するだろうか。あるいは、その花が世の中の誰にも知られず、百科事典や図鑑にさえ載っていない——この世に存在を知られていない——としたら、私たちは自分が認める香りを否定するのだろうか……？

ヒンドウの思想家ヴィヴェーカーナンダの講演録『シカゴ講義』を読みながら、そのようなことを思わせる文章に出会った——「バラは、他の何という名で呼ばれてもよい香がする」。私たちは、存在するものには名が冠せられているということに無意識のうちに理解している。しかしそれはある意味、名によってその存在を限定し、封じ込めようとしているということ

A5判・本体588円・〒70円
 定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

教皇フランシスコとの対話

みずからのことばで語る生活と意見



枢機卿時代、ジャーナリストの質問に率直に答えた注目ロング・インタビュー。生い立ちや家族、司祭への道のり、自らの信仰、教会の抱える問題を、本音で語る。

◎ 四六判・240頁・1500円＋税

かもしれない。また同様に、名をもたないものの存在を認めないという考えをも生じさせるかもしれない。

先日、〃日本人とキリスト教〃について探求されていた司祭井上洋治師を天に送った。大学に入り、どのような本を読むべきかを先輩にお尋ねした際に勧められたのが、アウグスティヌスの『告白』と井上師の著書である『余白の旅』だった。あの本を読んだときの衝撃、感動、そして不思議と自分が肯定されたような安心感は今でも忘れられない。

あるとき井上師は、ビール瓶を指さしながらこうおっしゃったそうだ。「これが『ビン』という名前がつけられる前のこと……、そういったことを知りたいんだ」と。

名によって存在を把握しているという感覚。しかし真理は、私たちが名をもってそれを捕らえようとしても、自らを立ち現しながら風として吹きぬけ、芳しいまことの香りを放ち続けることだろう。

(かとう)

〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1
 TEL: 03-3260-6148
 FAX: 03-3260-6198

新教出版社
創立70年記念
連続神学講演会
のご案内

- 4月26日 宮田光雄氏 「バルメン宣言の政治学」
——バルメン宣言80年を覚えて
 - 7月26日 佐藤 優氏 「危機を超越する福音」
——フロアートのカ受肉論に学ぶ
 - 10月25日 荒井 献氏 「最後のパウロ」
——使徒行伝28章30—31節に寄せて
- いずれも土曜午後2時より日本基督教団 信濃町教会にて（第3回のみ予定）。入場無料ですが事前にメールかファクスでお申込をお願いします。

アマゾン Kindle 版
発売中 携帯でも読めます

月刊誌『福音と世界』
4月号 (特集: 神のことば? 聖書を神学する)
◆定価 540円

単行本
ポウカム イエス入門
ハーマー 折られた花
日本軍「慰安婦」とされた
オランダ人女性たちの声
◆いずれも定価 1250円

オンデマンド版出来
バルト キリスト教的生イ
最晩年の「和解論」の倫理。
天野有訳。 ◆本体 8800円

私の聖書物語



イースター黙想

4月23日

宮田光雄 著
ボンヘッファー、バルト、フルトリツカ、シャガールといった神学者や現代美術家、そしてパウロの復活観を辿りながら、キリスト教信仰の核心である「復活」の理解を深める味わい深い黙想集。巻末に著者の信仰の自伝ともいうべき『私の聖書物語』を収録。
◆B6変・本体1800円



神の国の種を蒔こう

4月25日

W・M・ヴォーリズ著 / 木村晟監修 キリスト教メッセージ集

ヴォーリズは日本人を深く愛し、近江八幡を拠点に、建築家、教育者、実業家、伝道者として超人的な働きを残した。本書は、彼の多彩な活動の中核にあつた信仰を伝える珠玉のエッセイ70余編や、自伝的エッセイ「一粒の信仰」等を収録。激動の時代をひたすら神の国を目指して走つた一信徒の姿とその志を追うことができる。没後50年記念
◆四六判・本体2000円

自民党改憲草案を読む

横田耕一著 (よこた氏は九州大学名誉教授)
その危険な本質を喝破!
4月下旬

基本的な人権や平和主義のみならず立憲主義自体を脅かす危険な本質。その見過ごされがちな問題を分かりやすく解説した、独習用にも学習会に最適なブックレット。
◆A5判・本体900円

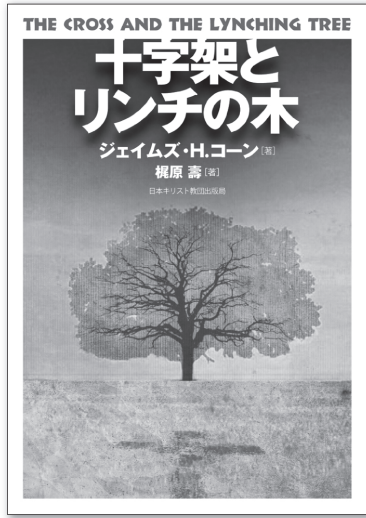
好評の既刊

神学の履歴書



佐藤優 著 初学者のための神学書ガイド
バルトからマクグラスまで初学者が読むべき13冊の読みどころを解説。佐藤流神学書講読ゼミ!
◆四六判・本体1900円

黒人神学の先駆者の「全著作の継続であり完成点」



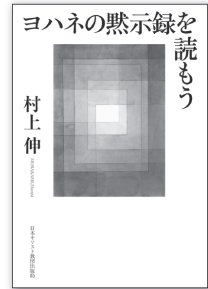
十字架とリンチの木

ジェイムズ・H.コーン 梶原 壽 訳
米国南部で「リンチの木」に吊るされた何千もの黒人は、繰り返し十字架につけられたイエスそのものであった。リンチの歴史的傷を癒すための対話の端緒であり、あらゆる人種・民族差別に抵抗するすべを探る必読書。

◆A5判 上製・306頁・4,104円

ヨハネの黙示録を讀もう 村上 伸

キリスト教迫害の下で書かれた黙示録を、現代と重ねつつ46回にわたって読む黙想集。確かな生の基盤を示し希望を語りかける。
◆四六判 並製・208頁・1,944円



ホームページ更新情報



聖書日課『日毎の糧2014』 電子書籍版 配信スタート!!

いつでも日課を確認し、日々みことばに親しむために。

詳しくは <http://bp-uccj.jp/publications/higoto2014/>

定価七八円(税抜七二円)(〒62円)

一年分二三〇〇円(送料共)

発行所 東京都新宿区新小川町九―一 一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三―三二六―六五七〇 振替〇〇―一七〇―一五―二六七九
発行人 本村利春 編集人 中川 忠 印刷所(株)平河工業社
販売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三―三二六―五六七〇